

白金藪

1月号



平成 28 年 1 月発行

第 59 号

白金葭定例句会案内

二月十九日(金) 12:00 ~ 15:00 コピアン兼題・蔦の臺、バレンタインの日

三月十八日(金) 12:00 ~ 15:00 第三兼題…お水取り、鳥臺

四月十五日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第三兼題…梨の花、春眠

蔦の臺、バレンタインの日の参考句 (二月十九日分)

ふきのたう苦し苦しと酒すむ 鳥海高志

ふきの臺一寸法師の腕のなか 白井幸子

ほろ苦きわが来し方や蔦の臺 水上山機

わがためにうまれしをんな蔦の臺 平井照敏

徳利に満たす地酒やふきのとう 吉田典子

水ぐるまひかりやまずよ蔦の臺 木下夕爾

知らぬ間に蔦の芽がでる柿畑 岡本永二

遠く去るものへ風吹き蔦の臺 桂信子

バレンタインデー沖に線船が行く 和知喜八

余生とはいへどもバレンタインの日 小口理市

雪だるまもちがふ君バレンタイン 依光陽子

バレンタインデー荒鶉は海猫の見張役 角川源義

バレンタインの日なり山妻ピアノ弾く 景山筍吉

バレンタインデーの奇襲の白檀古事 鈴木栄子

愛の日や鉄路に新らの砂利敷かれ 北野民夫

月例句会報 (’16 / 1 / 15 7名欠3) (歳旦吟)

飯田孝三

うかうかと七廻り屠蘇の猿の面^{つら}

絵馬馬の腹ほど膨れ初詣

届きしか戦野に祖母の霰餅

堂に満つる児等の顔四方拜

猿面^{ましらつら} つらつら艶の初温泉

増田陽一

冬菜畑浅蜷の穴も残りけり

遠筑波鋭角に澄み年酒かな

冬の蚊とシベリア産の鴨かな

年越して薊の絮は地に沈む

沼よりの真鴨の声や花アロエ

光成高志

初詣榎の大木傘に入る

書初めの子のケータイ写真来る

窓開けて遠初富士に挙手の礼
初詣列一町二町どこまでも
渡す手受くる手交差お年玉

難波より迎春引菓子届きたり

人の渦その中曲独楽平成館

折紙の猿を乗つけてお年玉

初電車白き杖つき笑ひをり

梅檀の一本倒す初仕事

昼の膳殊ににぎやか三ケ日

当らぬときめし福引大当り

初鏡まづは笑顔を映しけり

元日の夕映え町を包みけり

良きことの少し多くて去年今年

病棟に夜どほし点せ聖樹の灯

光
みち

病室に望の月見る聖夜かな
病室に白湯飲む四温日和かな
初場所や鯛の目玉を口中に
杖に出で空の色濃き門の春

松村幸一

狐火のひとつこちらを見たやうな

初芝居あの役者もし居たならば

雑煮餅引きもほどよく寿

成人日即ち徴兵検査だった

夢のせし猪牙の舟路や都鳥

吉羽多美子

武者昭七

寒風や海遠さかる新幹線（北陸新幹線開業）

風花や駅夫の呼子凜と鳴り

切り口の色冴え冴えと枝おろす

冬夕焼冥途の空もかくあらむ（知己多く逝く）

風花を肩に越路の旅終る

倉田紀子

浅野正美

逃げ惑ふ子を抱き上げて獅子口へ

獅子の口カチカチカチと頭食む

七福神巡りて歩く人の群れ

松納め掛軸変えて春を待つ

初詣梅ほころびて鈴緒ふる

青木啓泰

初詣翼のような上着着て

初日の出昇り切りたる寒さかな

除夜の鐘いくつ残して眠りたる

外面をまず沈めけり冬至風呂

幕引きは冬至風呂なる猿芝居

選句結果 (数字は入選数 左添書きは添削句)

4 除夜の鐘いくつ残して眠りたる

4 元日の夕映え町を包みけり

3 逃げ惑ふ子を抱き上げて獅子口へ

3 初詣翼のような上着着て

2 杖に出て空の色濃き門の春

2 初詣列一町二町どこまでも

啓泰
多美子

正美

啓泰

紀子

高志

2 絵馬馬の腹ほど膨れ初詣

2 初日の出昇り切りたる寒さかな

2 初鏡まづは笑顔を映しけり

2 雑煮餅引きもほどよく寿

2 折紙の猿をおもてにお年玉

2 折紙の猿を一緒にお年玉

2 折紙の猿を乗つけてお年玉

2 猿面ましらつらつらつら艶の初温泉

1 沼よりの真鴨の声や花アロエ

1 窓開けて遠初富士に挙手の礼

1 風花を肩に越路の旅終る

1 風花を肩に越路の旅にある

1 病棟に夜どほし点せ聖樹の灯

1 夢のせし猪牙の舟路や都鳥

1 良きことの少し多くて去年今年

1 冬夕焼冥途の空もかくあらむ (知己多く逝く)

1 松納め掛軸変えて春を待つ

1 成人日即ち徴兵検査だった

1 年越して薊の絮は地に沈む

1 病室に望の月見る聖夜かな

1 外面をまず沈めけり冬至風呂

1 病室に白湯飲む四温日和かな

1 初場所や鯛の目玉を口中に

孝三

啓泰

多美子

幸一

みち

孝三

陽一

高志

昭七

紀子

幸一

多美子

昭七

正美

幸一

陽一

紀子

啓泰

紀子

〃

1 獅子の口カチカチカチと頭食む

1 人の渦でき曲独樂の平成館

1 人の渦その中曲独樂平成館

1 渡す手受くる手交差お年玉

1 渡す手と受くる手交差お年玉

1 当らぬときめし福引大当り

1 うかうかと七廻り屠蘇の猿の面^{つら}

1 昼の膳殊ににぎやか三ケ日

1 幕引きは冬至風呂なる猿芝居

1 難波より和菓子の届く大晦日

1 難波より迎春引菓子届きたり

1 寒風や海遠さかる新幹線（北陸新幹線開業）

1 冬菜畑浅蜷の穴も残りけり

1 狐火のひとつこちらを見たやうな

1 風花や駄夫の呼子凜と鳴り

1 初芝居あの役者もし居たならば

1 遠筑波鋭角に澄み年酒かな

1 七福神巡りて歩く人の群れ

1 切り口の色冴え冴えと枝おろす

1 書初めの子のケータイ写真来る

1 冬の蚊とシベリア産の鵜かな

1 届きしか戦野に祖母の霰餅

1 初詣櫃の大木傘に入る

正美

みち

高志

多美子

孝三

多美子

啓泰

みち

陽一

幸一

昭七

幸一

陽一

正美

昭七

高志

陽一

孝三

高志

初電車白き杖つく人の笑み

初電車白き杖つき笑ひをり

堂に満つる児等の顔四方拜

梅檀の一本倒す初仕事

初詣梅ほころびて鈴緒ふる

一句鑑賞

光成高志

獅子の口カチカチカチと頭食む

正美

獅子舞の獅子の口を子供の頭につけカチカチさせ囃

む真似をしてその子の幸せを祈る正月の風景。元々は正

月に獅子頭をかぶり家々を訪れて舞って新年の祝福・家

内安全・火災予防を祈る門付けの一つ。万歳、猿回し、

人形まはし、鳥追いなどは皆門付けの芸であるが、殆ど

すたれてしまった。獅子舞は初詣の舞台などで行われて

いる。いつかの正月では、上野の博物館玄関前で紙きり

の後、獅子舞となり、その最後は子供の頭を噛んで終る

のを見た。獅子頭を見て大泣きしたり噛まれる真似で泣

き叫ぶ子が昔はいたが、最近の子は平気なのが多い。正

美さんの「逃げ惑ふ子を抱き上げて獅子口へ」という描

写の句が投句されたのを見るとそうでもなさそうだ。

初場所や鯛の目玉を口中に

紀子

初場所を升席かテレビ観戦中の人の描写の句である。

「鯛の目玉を口中に」とあるから、煮付けか焼いた頭の

目玉をえぐって口に放り込みもぐもぐさせている。当人が白い眼球を口中から出そうと目を白黒させている様が想像できる。これは滑稽ではないか。それは同時に正月の目出度さでもある。土俵の力士の肌の照りなどが「や」の切字によって全部省略されている。

雑煮餅引きもほどよく寿

幸一

この句も類想がありそうであるが、雑煮餅の柔らかさ、その口からの引きはがす長さが程よい長さで美味しくいただける有難さ。寿命が伸びるよと雑煮を食べている正月のめでたさ。「寿」をいのちながと読ませる俳句の常套に従った手練の句。

年越し蕎麦は地に沈む

陽一

年越し蕎麦を食って新年を迎える地には蕎麦の絮が沈んでいる。蕎麦の漢字を分解すると、草冠に魚と刀となり、魚のような刺刺した骨があつて刀のように刺す花ということになる。八重山方言では「アザ」は「トゲ」を表すとか、「ミ」は意味を持たない接尾語から「アザミ」となったという説もあるそうだ。淡い赤紫の花が終ると、冠毛が羽毛状になって種を飛ばす。これが蕎麦の絮であるが、絮も真つ白であり美しい。緑の黒髪も銀しろがねの白髪も美しいのは同じだ。陽一さんの心内を想像してこういう鑑賞になりました。

元日の夕映え町を包みけり

多美子

元日の夕方の町を詠み込んでその情懷を「けり」の切字で詠嘆している佳句と思う。町に長年住み馴れた愛情がないと詠めない。「元日の手を洗ひをる夕ごころ」（龍之介）の屋外風景と見ていいと思う。

一句鑑賞

飯田孝三

杖に出で空の色濃き門の春

紀子

淑氣漲る元旦、門前に歩を運ぶ熟年、えてして足腰に故障をかかえがち、目下、杖を放せないが、今年は、軽快の足取りを取り戻すに違いない。天上、真澄の氣韻が何よりの吉兆だ。杖「に」がうまい。さりげなく押えて、胸懷が滲む、氣息絶妙、妙手である。

逃げ惑ふ子を抱き上げて獅子口へ

正美

獅子舞の振るまいを怖がり、逃げまわるお子さんの様子が目の当たりだ。獅子にお頭を噛まれ、泣き出す幼子を抱き上げて、褒め、あやす親御さんたちの笑顔も目に浮ぶ。ただ「獅子口」は、少々生かも、むしろ末「へ」をとって名詞止め「獅子の口」だろうか。

昼の膳殊ににぎやか三ヶ日

多美子

盆、正月の帰省ラッッシュと駅の出迎え、見送りの光景は、テレビ画面でつとにお馴染み。離れ住む家族の帰りを待ち侘びるのは、どこでもみな同じ、幼い子供たちは、いとこ、はとこ同士、再会を喜び燥ぐ。殊にお正月、

心尽くしのお節料理に大いに食卓が盛りあがる、めでたし。「昼の」が勘所、主役は幼子たち。余弁ながら、「膳の賑わい」といっても、熟年、せめてお正月、気張った料理を嗜む図ではない。孫来て良し、帰ってよし。

初詣列一町二町どこまでも

高志

今更、初詣の長蛇の列に目を瞠るのである。「一町二町」の量みはむろん延々の謂い。「丁」ならぬ「町」が、町並みの広がりをつつぷり目に見せる。思わず口をついた一句だろう。「初詣」で半服。仮に初詣「の」を措くと散文の限り、俳句は調べ。破調は形に入り、形を出し「列」に繋がるもどかしさを窺わせる。

風花や駅夫の呼子凜と鳴り

昭七

別句、越路を巡る旅は、終盤の一句。風花は、冬の晴天にちらつく雪、群馬などでは「吹越」ともいわれ、主に太平洋側で見られる。「呼子」はいうまでもなく、発車合図の笛、出だし「風花や」が切れ鮮やかに、臨場の身を切る気韻さを伝えるので、あえて「凜と」は要るだろうか、ゝ呼子「響きける」なども一案かも。

雑煮餅引きもほどよく寿

幸一

「ほどよく」がめだたい。母音才は、褒める、惚れるなど音色めでたく、心を綻ばせる。まして上中七畳、餅の延びるようすにも通い、ほのぼの、気分が膨らむ。ふくらかで、のびやかな調べを受けとめる、座「いのちな

が」の短律は、恰も長寿を言祝ぐばかり、白寿百寿請け合い、めでたしめでたし。「ほどよく」の慎ましさ、いや余裕がほのと俳諧をこぼす。

折紙の猿を一緒にお年玉

みち

今年の干支は申（猿）、お年玉の天袋に折紙のお猿を重ねて、お孫さんたちに手渡する場面である。例会出句は「猿」をおもてに、句席では、そこに意見いろいろ、その一案が右掲中七（勝手にご免なさい）。いち早く干支を読み込み、和やかなうから三代交歓のようすを目に見せる。めでたい。お猿はきつとお手折だろう。干支は猿ならではの縁起に因む一句である。

外面をまず沈めけり冬至風呂

啓泰

とかくこの世は住み難いとは、今更ではないが、男一匹（いえ、今やご婦人方も同列）七人の敵^{かたき}はともあれ、いくつになつても、氣遣い、氣疲れ、ほんに苦勞は絶えぬもの。行雲流水、明鏡止水は嘘つばち。家に帰つてとつぷり湯に浸かり、漸くほつとする次第。「冬至」風呂の厳しさが身につまされそう。これが下五「柚子湯舟」だと、艶がのる。

沼よりの真鴨の声や花アロエ

陽一

一読、真鴨とアロエの取り合わせの斬新さが目を射る。真鴨は、多くシベリアから冬に渡来、北海道や本州の湖沼で繁殖する、俳句では馴じみの水鳥。アロエはアフリ

カ南部原産、乾燥地に分布。日本では鑑賞用・薬用に栽培される。葉は多肉、花は橙赤色、総状。その風情とデエゲエ、騒がしく鳴きたてる真鴨との取合せは、相似対照交々、「や」の抜けつぷりと相まって何やら俳諧の気を漂わせ妙。頭「沼より」が広がりを取り込み、瞞目にして新風、独自。

一句鑑賞

武者昭七

成人日即ち徴兵検査だった

幸一

我が国が近代国家としての軍備を整えるために明治五年に定められたのが徴兵検査だった。二十歳になった男子の義務であった。以来どれだけの有為な若者が軍国日本のために命を落としていったことか。かつて僕は信州に無言館をたずねた際、部屋ごとに掲げられた描きかけのままに残されたたぐさんの絵とメッセージを眺めながらむなしく奪われたおおくの才能と無念を想い涙をこらえられなかった。いま成人の日という祝日、若者たちがきらびやかに装いながら笑いかわしているのをみればあの時代を知る者は深い感慨にとらわれてしまふだろう。そのため息に似た思いが定型をあえて外したリズムにあふれている。「だった」では済まされない時代が近づいているように感じてしまう昨今だ。

良きことの少し多くて去年今年

多美子

「少し多くて」に共感。まことにトシをとると「良きこと」は少なく切ないことや「悪しきこと」ばかりが重なってくるように思うのは気のせいばかりではないようだ。「少し」でも良きことに出会えた作者に祝福。

除夜の鐘いくつ残して眠りたる

啓泰

除夜の鐘を数えているうちにいつのまに眠り込んでしまう。めざめてから「アレツ、いくつまで数えたつけ」と改めて数えなおしてみる。しかしめざめた時はもう新年だ。去年も今年も棒のように繋がっているとかいいう俳句もあったと思ひ出して納得。去年同様今年も頑張りましょう。

松納め掛軸変えて春を待つ

正美

門松は採り納めた。床の間の掛軸も普段のに架け替えた。さあ、あとは春を待つばかり。今年はずっとなにかいいことがありそうな調子。待春の気分が弾む。

折紙の猿をおもてにお年玉

みち

句会の席で「おもてに」という表現をめぐる議論があった。熨斗袋の上に手織りの小さな猿を重ねて子供にさしだす。子供の歓声。そんな情景が浮んでくる。適切なことばを掘り出すのは難しくまた楽しいと思う。

ハガキ句 59 報管見

飯田孝三

虫眼鏡中の綿虫綿抱へ

高志

虫眼鏡で綿虫を覗いたのである。拡大された虫眼鏡の中で、きまつて“綿”を抱えている。合点。むべ綿虫の名のゆえん。「綿虫のみな綿負ひて奇跡なし」(宗田安正 角川「俳句歳時記 第三版所掲」)。これにはどうも感じない。綿は抱える。でなければ、綿の思いは消え去るだろう。綿は「負う」ではなく、やはり「抱く」。句の臍である。又、掲句、ひびきがいい。「ムシメガネナカノワタムシワタカカエ」。思わず口ずさみたくなる。なんと、a 音二連四乗を締め括る「抱へ」は韻きの臍でもあるのだ。綿虫の浮遊感にも通うではないか。子供たちが歌いながら、家路につくありさまが想像される。「大綿は綿を抱へる白ばんば」(孝三)。

初冬や誓子の梅のはや新芽

敏子

きびきびした響き、立姿の端しさが、誓子に通じる気韻、句格をもつ。同人墓所での囑目。“おや、もう梅の新芽!”思わず、目を瞠る思いが「ハツフユヤ」、「ハヤ」と、「ハ」を畳み「ヤ」を次ぐ響きに手にとれる。誓子を仰ぐ思いが滲む臨場の句である。

綿虫が誓子の句碑のぐるり飛ぶ

宏之助

作者は生前の誓子に親炙された方と伺う。「句碑のぐ

るり」は、広く「天狼」一門の境。すでに物故された方々も少くないだろう。往時茫々。かつて句を競い、情意投合した誰彼を憶う。先師に慕い寄るころは一つ。「綿虫」に仮託する思いは深甚である。叙景かぎりの句ではない。

乾く音一本調子に炭切らる

かづひろ

冬はじめ弁天り琵琶弦固し

”

一句目、「二本調子に」が面白い。かくして、炭は滑らかに切り揃えられる。鋸を挽く耳障りな音が滑らかに響いて不思議。二句目、弦「固し」は、ぴんと張りつめたそれ。初冬の氣に通い、爪引く音が弾けて響き交う。

ハガキ飲むポストの口に冷え及び

璃子

ポストは自分の意思にお構いなくハガキを飲みこまされる。無造作に突っ込まれる。丁寧に差し入れられたのは、それも昔、初恋告白の手紙ぐらいだ。ハガキは日常の通知や謝辞が中身、およそ「熱っぽさ」と無縁。薄っぺらなくせに名前の響きだけが「HaGaKi」と口幅つたい。無頓着、冷淡。しかも、この頃では、メタリックな細い丸棒にでかい不体裁な四角箱を乗つけられ、口も二つに増やされた。全く。これじゃ寒夜の酔っぱらいだつて抱きつきやしない。それにしても、最近じゃ、ハガキを飲まされることがめっきり減ったな。ゴホンゴホン。投函時、直感の句だろうが、「冷え及び」がポイント。

「及び」には起点。どこから、何から、どうして。「冷え」は気象暖寒の気。「ハガキ飲むポストの口の寒さかな」ならぬ「くに冷え及び」である。時候の移りもさりながら、つくづく、世相、人心の移り変わりに感じ、惘然、口噤む擬人ポスト氏の心裏に触れた気がする。「ハガキ」のカタ仮名書きも巧まず周到。

開戦日どこか血の色冬暮

璃子

「血の色」が痛々しい。西洋では赤はキリストの血の色とか。それにしても、開戦日の記憶をもつ者は減ってしまった。当時、小生は、小学（その頃「国民学校」）三年、その朝、開戦を告げるラヂオニュースの張り詰めた声を、今もはっきり覚えている。「どこか」は、それからの、漠々、時間空間の隔たり。

鰭酒や竹のさやぎの風を聴く

羊三

一夜、鰭酒を酌みながら、竹叢を吹く風音に耳を澄ます。さて、「さやぎの風」はどうだろう。「風」を入れたのは、音の演出がねらいだろうか、「ヒレザケくサヤギくカゼく」。篁の風韻、“ざわざわ”に通うだろう。「風を聴く」が主、「鰭酒」は従。寂寞。仮に「鰭酒や竹のさやぎを聴きながら」だと、主従入れ替わり、鰭酒が腸に浸みる。

草月活花展の句

アマリリス二輪海松燃え立たす
支柱まで葉蘭の波が打ち上がる
敏子
グロリオサ固まり活けて炎なる
高志
”

草月活花展には小生も同行。会場に入ると、まず、白塗り人様柱の大オブジェに驚き、満堂、干花、染花、塗花、生花の百花放斉に目を奪われてしまった。さすがお二人は、対象を確かりと視てとらえ、ありありとその正体を描写されている。「燃え立たす」（一句目）、「打ち上がる」（二句目）、「炎なる」（三句目）が然り。

（駄句近作）

ルノアールの女柚子風呂知らざりし
たまさかの會釋はて誰枇杷の花

（旧作推敲）

先の草月活花展の拙句の一部を推敲しました。

腕づくで男活ける草の花（原句）

腕づくで男活ける秋の花

種瓢担ぐ天秤赤い蔓（原句）

秋の花種担ぐ天秤赤い蔓

季語は四季の名を冠すればいい、てなもんじやない。そのことをつくづく反芻しました。「草の花」は特定の花を描きたいのですが、成りません。（平22・12・26）

ハガキ句 59報 (10・11・29)

十一月四日草月展五句

アマリリス二輪海松燃え立たす

秋の花種担ぐ天秤赤い蔓

とくさの茎水盤ひたに直立に

支柱まで葉蘭の波が打ち上がる

グロリオサかたまり活けて炎なる

十一月二十六日高幡不動尊三句

虫眼鏡中の綿虫綿抱へ

初冬や誓子の梅のはや新芽

綿虫が誓子の句碑のぐるり飛ぶ

栗食めばつくづく祖母の母のこと

お西さままでの道程田圃原

乾く音一本調子に炭切らる

冬はじめ弁天り琵琶弦固し

開戦日どこか血の色冬茜

ハガキ飲むポストの口に冷え及び

鰯酒や竹のさやぎの風を聴く

お便り広場 (到着順、敬称略)

お手数さまです。忘年会抜けられませんか欠席させていただきます。皆さまによりしくお伝え下さい。

敏子

孝三

高志

高志

高志

高志

高志

敏子

宏之助

孝三

孝三

かづひろ

璃子

璃子

羊三

芋嵐墓地を求めて西東

やつぱり私はこの一句。駅に西口東口、墓地を求めて

西東。風景の呼吸違いです。(H 27・12・14 青木啓泰)

白金葭十二月号頂きました。二十五日賀状終了。なに

もかくことなく、来年の記念誌を楽しみにしています。

来年また数人の会でなければお会いしましょう。た

だろくな俳句ができないのが残念です。よいお年を。呉々も

御身体を御大切にして下さい。(12・26 小山陽也)

白金葭 58号美しいですね。年末毎日あわただしい中

心が洗われるようです。冬至も型どおり柚子湯に浸かり

南瓜を食べ一日終わりましたが翌日から急に日が少々

長くなると云うこともなく今年も終了に近づきつゝあ

ります。季語も冬新年と沢山あり皆様の秀句が楽しみです。

いろいろお世話になりました。二〇一六年来る年もよろしくお願い申し上げます。お体お大切に遊ばしませ。

(12・27 長屋璃子)

冬至湯や来し方包む湯気の色

光陰矢の如しの諺どおり今年も数え日となりました。

白金葭十二月号受け取りました。私も元気で年越しがで

きそうです。師走どこへ行っても何か気ぜわしく好きで

ない月です。昨日スーパ(イズミ)へちよつとの買物

に行く、少しの買物支払い長く待たされてスーパで豪

華な寿司に顔そむけ一人暮しの正直な気持です。来る年

は家族揃って幸せな年でありますように敏子さん無理せぬように。

(12・28 健三)

拝復白金葎第58号を拝受。今年もご健康で活躍の程を心から祈念しております。「ガチャマン」と揶揄嘲弄された昭和二十一年―三十年(一九四五―一九五〇)頃の機織工場の工場主の父(實)スマトラからの帰還兵の一人。機織機械の箴(おさ)の一打のガチャンという一音の度に一万円の儲けと誇大表現されるほどの成り金の時期贅沢がすぎてビタミン不足から敗血症。後悔反省から野菜回帰と菜食主義。「すき焼の葱を好みし人の逝く」(多美子)。この名句からの連想と回想。一九八〇年六九歳没の父。感謝して再度読む右の多美子さんの一句。ご健筆を祈念しております。草々第六十号一二〇号と連続する「白金葎」をともし祈念申し上げます。

(1・6 河村博巨)

あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願い申しあげます。会費+同封致します。「古代」「おめでとう」は別便です。今年はずばらしい出版物ができます。楽しみにしています。益々のご活躍を祈ります。呉々も御身体を大切にして下さい。今年はまた一度位はお目にかかりたいと願っています。

(1・11 小山陽也)

みち様 今日は大変おいしい鯛のあら煮をごちそう

様でした。昔母が作っていたのを思い出します。兄弟争って目玉をほしがったものです。こんなに親切に下さってお礼の申し上げようありません。ありがとうございました。これからもつたないながら句を作り続けてゆくことが何よりのお礼と思っております。又、会からもお見舞いをいただきありがとうございます。のどごしの良いクリームチーズを楽しんでおります。どうぞ御主人様はじめ会の皆様様に宜しくお伝え下さい。

(1・14 倉田紀子)

先日の例会ではたいへんお世話になりました。特集号編集のご苦勞を改めて思いました。そのうえ、とんだお騒がせなどして恐縮でした。月例の駄文と、別紙吟行自選10句をお届けします。季題別選の拙稿は、後日、郵送いたします。いま暫くご猶予下さい。寒中、ご夫妻共々御身ご大切に、ご健吟のほどを祈りあげます。

(平成28・01・17 飯田孝三)

受贈誌 (H 28年1月号)

人体のおほかたは水冬籠 (彩126号) 平野ひろし

まむし酒雀蜂酒冬籠 (〃) 〃

眠ければ寝る八十の冬籠 (〃) 〃

五町歩のコスモス沈め大出水 (〃) 平山三郎

桑の木に芥の投網出水跡 (〃) 〃

圧し合へるくだらぼつち雲の嶺(一)

工藤直子

見えぬもの見え来て八十路さやかなり(飛行雲三号)

駿河岳永

仰向けに口開け用済み案山子かな(あすか一月号 山尾かつひろ

縁側に日のあるうちの福寿草(東京クラブ11月) 理佳子

校庭にボール残され年果つる(一)

輝子

暁闇の太鼓一打に淑気かな(一)

璃子

まむかふて拭はぬ老いの初鏡(二)

〃

俳窓評論纂

＊昭七さんの鑑賞文の他一枚に孝三さんとの車中の話しのことが書かれてあつた。藤村の千曲川旅情のうたの中で遊子と旅人が出てくるが、遊子と旅人はどう違うのかという間に答えられた手紙である。結論は同じ意味と
言うわけで、それでは面白くないので昭七さんの感想を陳べられてある。芭蕉の句では「旅人とわが名呼ばれん初時雨」「椎の花のこころにも似よ木曾の旅」「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」があり、共通しているのはどの旅も明確な目的と目的地をもっていることで、あてのない旅をわざわざ「放浪の旅」とか「さすらいの旅」とか修飾語をつけて呼び習わしているのはそのせいと思う、とある。一方李白の「友人を送る」には「浮雲遊子意落日故人情」とあるから、流れる雲は旅立つ君の心、沈む夕陽は見送る私の気持ち、そのものだという意味。

藤村の詩での「雲白く遊子かなしむ」はおのれの姿を雲

にたとえ、目の前を過る旅人は急ぎ足で目的地に向つて

いるのに自分はあてなく空を流れる雲のようだと感じ

入っているのではないでしようか、同じ意味の言葉でも

内実に深い違いがある、と結んでいる。

以下は編集子の注釈&意見である。李白の友を送るの詩は、

青山横北郭 青山^{せいざん} 北郭^{ほくかく}に横たわり

白水遶東城 白水^{はくすい}東城^{とうじょう}をめぐる

此地一爲別 此地一たび別れをなし

孤蓬萬里征 孤蓬^{こほう}萬里^{ばんり}にゆく

浮雲遊子意 浮雲^{ふうん}遊子^{ゆうし}の意

落日故人情 落日^{らくじつ}故人^{こじん}の情

揮手自茲去 手をふるひてこより去れば

蕭蕭班馬鳴 蕭蕭^{しょうしょう}班馬^{はんば}鳴く

である。遊子は漢語、旅人は和語とみてもいいと思う。和漢朗詠集』の暁と題する詩に「遊子猶ホ残月二行ク。函谷二鶏鳴ク」

とあり、これを枕草子の「大納言殿まあり給ひて」の段に清少納言があつた香炉峰の雪の間に答えて御簾を上げたと同じような趣

旨で大納言をいみじうめでたしと褒めている。こゝも遊子であつて、旅人ではない。藤村の詩の遊子は自分、旅人は行商人のこと

とする訳もあるようです。芭蕉の旅人は単なる空間移動ではなく、

「莊子』にいう「無何有の郷」に向う、向おうとする芭蕉その

人を表している。見た目には「僧にもあらず俗にもあらず、鳥鼠

の間に名をかうぶりの鳥なき島にもわたりぬべく」と鹿島詣にある。旅人とわが名呼ばれんの句は、三冊子にある通り、勇ましき心を表明しているのだと思います。

* 今月1.18の天声人語に台湾万葉集の歌が紹介された。

本誌エッセイにて飯田孝三さんが疾うに紹介されたものである。編著者の孤蓬万里のことも書かれてある。

近く出版する本誌五周年記念号のエッセイに収録してあるので、そこで改めて読んでいたぶきたい。本省人と外省人との軋轢が薄れ、戦後七十年経て台湾人意識が若い世代に増えて独立志向の民進党の主席が今年総統になる。台湾は日本列島と同じく、地球のプレートに押され押されて出来た島であつて、地震もよく起こる。今も高山が隆起している若い島嶼である。万葉ぶりの詠める台湾人の方々とはお互いに独立した人間として親しく付き合つていけると思います。

* あすか一月号は年度大会の様子がたくさんの写真と共に詳細に報告されてある。中にピアノコンサートも行われ、かづひろさんの妹さんが演奏され、そのページに付箋が貼られてある。懇親会の写真、会員の感想文と俳句作品抄と続く。一位の句は

眠る児の拳のゆるむ花菜風(平井伊佐子) など六十四人の俳句が羅列されてある。出席者は五十三名であつたとか。童子の弘前での大会を想起させた。

恋の歌を読む

その十

武者昭七

大空は恋しき人のかたみかはもの思ふことに眺めらるらむ

古今集 七四三番 酒井人真

「かたみ」は、死んだ人、別れた人を思い出すよすがとしているもの。「かは」は反語の助詞。「らむ」は目に見えないことを推量する助動詞であるところから、「どうして・・・なのだろう」と原因や理由を推測するのに使う詞になった。「ながめ」はぼんやりともの思いにふけりながら遠くをみていること

大空はあのひとの形見だというわけではないのに、あのひとを思うたびになぜかわたしはそれを眺めいつてしまふ、というものです。

空はわたしたちに遠いもの。はるかかなものへの思いをさそいます。恋人はもうなくなっているのか、それともほかの人に走ってしまったのか。いずれにせよ遠い人になってしまったのです。それなのにまるで空があのひとの形見であるかのようにと、作者は断ち切れない悲しみとこころの不思議を嘆いているのです。

芭蕉の軽み以後 (46)

光成高志

桃青は点取俳諧師として江戸で活躍するのは延宝八年までで、その歳の冬に深川に隠棲した。この理由につ

いて現代では色々憶測されている。ある人は甥の桃印と妻の寿貞が駆け落ちして、行方をくらましたので、桃印を死んだことにして出国後五年ごとに帰国しなければならぬという藩法をすり抜けたという。そういうこともあったかも知れないが、私は俳諧の上での人生観が変わったのだと思う。芭蕉がまだ郷里にいた頃から、文壇に隱者志向が広がっていて、延宝年間にその志向は文士の間に広がっていた。宗祇や西行は芭蕉の憧れの古人であつた。そういう時代風潮に乗ってそれを実行しようとしたのだつた。正月から『莊子』を学び始めてこの人生哲学に大いに魅かれたのだ。貞門風から談林風へ転じ、やるべきことを皆達成したのが延宝八年春であつた。俳壇慣例の万句興行は済ましており、『桃青 独吟二十歌仙』を刊行して門人二十一名を抱える桃青門の存在を世に問うている。更にこの秋には、桃青判・基角句合『田舎句合』同・杉風自句合『常磐屋句合』の姉妹編によつて時流の先端を行く桃青門の技量を誇示している。夏には神田水道工事は終了しており、この責任は果たしている。又七月には將軍宣下があり、後の犬公方こと綱吉の登場があり、狂信的な政治が始まっている。こういう世を俳諧師で渡っていくのは無理と気づいて陸沈したのではないかと想像する。陸に沈むとは一市井人となつて俗世間と親しく付き合いつつ自らの芸道に励むことを云う。

後の「笈の小文」にあるように「かれ狂句を好むこと久し。終に生涯のはかりごとゝなす。ある時は倦で放擲せん事をおもひ」とまで絶望的になつたこともある芭蕉が『莊子』によつて開眼したのである。莊子への傾倒ぶりは田舎句合の嵐亭治助(嵐雪)の序文によく表れている。「桃翁栩栩齋いまして、為に俳諧無尽経を説く。東波が風情、杜子がしやれ、山谷が気色より初て、其体幽になどらか也、ねりまのやまの花のもと、謂北の春の霞を思ひ、葛西の浦の月の前、再江東の雲を見ると、螺子此語にはづんで、農夫と野人とを左右にわかち、詩の体五十句をつづる、章のふつつかに、語路の巷のまがり曲れるをもつて、田舎とは名付けたるべし、・・判詞、莊周が腹中を呑んで、希逸が弁も口に蓋す」は芭蕉の莊子熱を伝えている。例えば六番の左右の句は右勝とする。

左

俗にいううぶめ成べしよぶこ鳥

農夫

右勝

鳶に乗て春を送るに白雲や

野人

「・・右の句の鳶にのつて無窮の空々たるに逍遙せん事、楽、猶きはまりなかるべしや」の判詞は『莊子』の「逍遙遊」から判定を下している。その訓読した文章を下に示す。「故に夫かの知は一官に効いさあり、行いは一郷を比したしませ、徳は一君に合かない、而えは一國

る。」以下次号。

我孫子日記

| | |
|-------|-------------|
| 12/18 | 例会 |
| 12/23 | 注連縄 |
| 1/1 | 初詣 |
| * | 1/3 |
| *2 | 湯島・お 茶の水 |
| | 1/10 |
| *3 | あわんと あり |
| | 1/15 |
| | 例会 |

* 穏やかな元日である樺透き 高志
*2 曲独楽回るその下扇開きつゝ みち
曲独楽の刀の縁を渡りつゝ 高志

*3 あわんとり唱和し点火あわんとり 高志
竹櫓爆裂の音あわんとり 〃
〃 〃

編集後記

ハガキ句と本誌が同じ番号になった。来月は六十号の丸五年になります。私の芭蕉の文は山場にきました。春までには峠を越します。これから五周年記念号の編集にかかります。啓泰さん陽一さんの20句を待ちます。

に徴めざる者の、其の自みずから視ることまた此かくの若
ことし。而して宋栄子ソウエイシは猶然ユウゼンとしてこれ
を笑う。且かつ世を挙こりて、これを誉ほむるも勤はげみ
を加まらず、世を挙こりてこれを非そしるとも沮くしけを加
まらず、内外の分を定め、栄辱の境キョウを弁ず。斯これの
み。彼れ其の世に於けるや未だ数数然サクサクゼンたらざ
るなり。然りと雖いども猶なお未だ樹たざるものあるな
り。夫それ列子レツシは風に御ギョして行き、儼然レイゼンとし
て善よし。旬有五ジュンユウゴ日にして後のち反かえる。彼れ福
を致す者に於いて未だ数数然たらず、此れ行あるくこと
を免まぬかと雖も、猶待たのむ所の者あるなり。若もし夫
それ天地の正に乗じて六氣の弁に御し、以て無窮に遊ぶ
者は、彼且た悪いずにか待たのまんとするや。故に曰わ
く、「至人シジンは己おのれなく、神人シンジンは功いさおしなく、
聖人セイジンは名なし」と。更に訳文を写すと下の如くで
ある。「だから、その知識は一つの官職に任ぜられて功
績をあげるにふさわしいというだけ、その行為は一つの
郷むらを感じて睦みしなませてゆくというだけ、
そのすぐれた徳と秀でた才能が一国の君主の思し召し
にかない、召し出されて知遇を受けるというだけの、あ
の人々（世間でいう秀才たち）が、自分のことをふりかえ
るとき、この蛸ひぐらし・学鳩（こばと）鵲（うずら）がおのれの小さき
飛翔を至上のものと思うその卑小さと似ているのであ

白金霞 第59号 平成28年1月発行
編集・発行人 光成高志（Tel & Fax 04-7187-1068）
発行所 〒270-1119 我孫子市南新木2-14-17
表紙の題字…加納綾女。写真1月21日の白金霞